額田木の駅プロジェクト

調査団体名　：　額田木の駅プロジェクト
設立年　：　2015（平成27）年
団体URL　：
活動拠点　：　岡崎市千万町町
取材日　：　2015年12月3日
団体代表者名　：　鈴木啓允
対応してくれた人の名前　：　唐澤晋平（実行委員会事務局長）
調査員　：　清水雅子、井上崇也
レポート作成者　：　井上崇也

活動内容

■沿革
平成26年10月　準備会設立
平成27年 2月　実行委員会発足
平成27年 5月　開駅式開催

■仕組み
・山から切り出された木を1トンあたり6,000円相当の地域通貨で買い取る。
・買い取った木は3,000円/tで岡崎市内のチップ業者へ販売し、差額は岡崎市の補助金より補填する（今年度は国の地方創生の交付金を使用）。
・出荷量は自己検尺で伝票に記入（末口×末口×長さ×0.75でトン数に変換）する。
・毎月1回、実行委員会を開き、出荷状況や地域通貨の利用状況についての報告や運用方法について協議する。
・換金は月末頃に事務局が登録店舗を回る。
・事務局手数料として出荷者から5%を徴収（発券時に差し引く）する。

■平成27年12月1日現在
出荷登録者数　85名
登録商店数　50店舗（額田地域及び周辺地域）

キャッチフレーズ

山も地域も元気に！

会のモットー（何を大切にしているか）

木の駅を通じて多くの人に山に関心をもってもらう。山を守る必要性を知ってもらう。

設立から現在に至るまで変化したこと

現在に至るまでといっても、5月に始まったばかり。ただ、当初考えていたより多く出荷されており、予算が足りなくなる可能性が高くなってきた。到底届かないと思っていた目標（年840トン）を超えそうな、額田地域の林業に対するポテンシャルの高さを実感でき、期待が高まっている。

連携している団体・専門家・自治体など

岡崎市林務課、額田林業クラブ、岡崎市ぬかた商工会、岡崎森林組合、森林ボランティア団体、近隣の木の駅

山村再生や、その担い手づくりに関わる具体的な活動（例：小仕事づくり、山村・森林資源活用など）

額田地域は現在も林家が多く、林業で成り立ってきた背景があり、こういった林業に関わる取組に対する反応が早い。木を切って出し、地域通貨を流通させる仕組みを作ることで、林や森に関わってきた人たちに、再びチェンソーをもって山に入ってもらうきっかけづくりになればと思っている。実際に老夫婦がひと月で10トン近く出してくる例もある。

現在直面している課題

木の駅から出荷される材は製紙用チップとなっているが、補助金頼みの現状から抜け出すためにも少しでも付加価値の高い売り方を検討していかなければならない。

今後やってみたいこと

・地元の子供たちを対象に、子どもの木の駅ということで、間伐、出荷、その対価で買い物まで行う環境教育をしたい。
・薪などで木の駅材を地域内で利用する取組み。
・手入れのできていない森林と、山を持っていない木の駅の出荷登録者とのマッチング。

そのためにはどんな情報・人脈が必要か

・学校関係者、間伐させてもらえる山に関する情報
・薪ストーブユーザーや薪ボイラーを使ってくれそうな施設

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞唐澤さんが木の駅に関わろうと思ったきっかけは？
＜答え＞宮城県で環境教育を行うNPOに所属し、額田のような中山間地域で活動していた。そうした活動の中で感じたのが、環境問題は長期的なものだが地域の問題は5年10年の期間でどうにかしなければならないものであるということだ。そうした現状をどうにかしなければならない気持ちを強く持った。昨年額田へ移住したところ、ちょうど額田木の駅プロジェクトの準備会が始まり、良いチャンスと思い関わることを決めた。資本主義的な物差しでみれば田舎はいらないのかもしれないが、自分はそれだけでは測れない魅力が田舎にはあると思っている。

チームオリジナルの質問

＜質問内容＞宮城県からのJターン就職者という視点から見て額田という地域はどう映るか。
＜答え＞少子高齢化が進む自分たちの地域を本気で何とかしたいと思っている人がたくさんいると感じた。まだそれが形にはなっていなくとも熱がたまっていけば、いつか火がつくのだろうと期待している。

その他、伝えたいこと

・額田は、もともと林業で成り立ってきた歴史があるので、今回のような木の駅プロジェクトに対する反応が早い。市の補助金の予算を840トン分つけていただいたが、当初はとても使い切れるほど木が出てくるとは思っていなかった。しかし、ふたを開けてみれば、予算が足りなくなることを心配するほど木が出てきた。そういった意味で、額田地域はポテンシャルが高いと言える。
・林業の衰退がそもそもの原因といえるが、木の駅プロジェクトだけではとても食べていけないので、木がどうしたら売れるかを考え、その仕組みを作ることができれば、山に興味を持つ若い世代は必ずいると思っている。山で生活していける、子どもを養っていけるような環境をつくることが田舎を活性化させることにつながる。そのためにも木を切って、売れるというレールを作っていきたい。
・林業をしていくために長期的視点で考えると、材を出しやすいところは造林をしていき、利用を行うというサイクルを確立していくべきだが、今はとても材を出せない奥地にまでスギ・ヒノキを植えてしまった状態である。そういった奥地は、天然林に戻し、天然更新に任すべきである。山のグランドデザインをもって取り組んでいけると一番いい。

写真

土場にて説明（左が唐澤さん）

地域通貨「森の健康券」

実行委員会の様子